

エッセイ

生きることは即興である，それはまるでへたくソな音楽のように  
2020～2022年 コロナ時代の活動記録を交えて

**Life is Like an Awkward Improvised Music.**  
Reflecting My Activity Record During the Coronavirus Pandemic (2020-2022)

ササマユウコ

Yuko Sasama

## 1. コロナと生きる

2022年7月24日、日本は世界で最も新規感染者数が多い国となった。この時期に検査を受けた筆者も無症状ながら陽性が判明し、この日から10日間の自宅療養を余儀なくされた。コロナ時代を生き始めた2020年2月から2年6ヵ月後の夏である。

自身は陽性だと言い聞かせ、ロールプレイのように家族と距離をとり、そして驚くほど眠った。しかもこの療養中に87歳の父が手術を受け、それに合わせた検査でもあった。父に感染させていたらと考えるとぞっとするが、一方で親子と言えども個の身体、個の時間、別のオンガクを生きる存在であることも再認識した。なぜなら私が関わらなくても手術は無事に終わり、父は父の人生を生きているからだ。その身体がゼロになる時、もしかしたら私は森でキノコを探しているかもしれない。ピアノを弾いているかもしれない。それぞれの身体には30年の時間差があることを思い出し、ここからお互いの身体はもっと離れていくだろう。

横浜のクルーズ船内でウィルスが見つかった2020年2月、雑誌の企画で神田川のクルーズ船に乗った。しかも同じ路線の屋形船から感染者が出たのはその数日後だった。そこから今日までずっと自粛モードが続いている。翌月には「死の哲学カフェ」<sup>iii</sup>も企画していたが、有名人の訃報が相次ぎ社会の不安が高まる中でのタイミングの悪さは言うまでもなく、何よりここから始まる緊急事態宣言の連続で会場の断続的閉鎖がほぼ1年間続く。予約は満席だったが延期の末に中止したのは、当時は初対面の人たちを画面越しに集める技量を持ち合わせていなかったからだ。テーマを決めた前年3月は死について「気軽に」考える場の必要性を感じていたので、この時代の変化は本当に想定外だった。

同月には聾者とつくるワークショップ<sup>iv</sup>も予定していた。広い会場での手話は問題ないと判断したが施設の閉館で中止となった。ここから彼らとは手話通訳者を複数交えたZOOMセッションを何度か経験<sup>v</sup>することになる。即興演奏や非言語コミュニケーションの経験が大変役に立つ経験だったが、「音のない世界のオンガク」についてはまた別の機会に触れたいと思う。

## 2. シェーファーの即興的人生

筆者は3.11を機に、カナダの作曲家R.M.シェーファーが提唱したサウンドスケープを「耳の哲学」<sup>vi</sup>に、アーティスト、研究者、哲学者と共に音楽や芸術を問う思考実験や対話の場をつくってきた。そして2021年8月、遂にシェーファーの訃報が届く。直接お会いする機会は無かったが研究室経由で手紙を送ったことがあり、身体がきつくなった父と同年齢ということも常に頭にあった。地元カナダやニューヨークのメディア各紙は、シェーファーの三つの肩書①カナダを代表する作曲家②作家③サウンド・エコロジストを添えて追悼記事に紙面を割いていた。日本ではサウンドスケープ提唱者のイメージが強いが、世界的には合唱曲からスペクタクルな舞台作品まで現代音楽家としての評価も高かった。コ

ロナではなくアルツハイマーが死因とあったが、商業主義や権威からほどよく距離を置いた音楽家の晩年は、家族や友人に囲まれた穏やかなものだったようだ。亡くなる数日前には音楽仲間が駆けつけ枕元で生演奏を披露すると手で応えたと書いてあった。

この追悼記事で知った事実がある。シェーファーは生まれながらに視覚障害があり8歳の時に片方の目を摘出していたことだ。幼い頃から絵の才能に恵まれた多感な少年にとって、この体験がいかに辛いものだったかは想像に難くない。それでも10代半ばまでは画家の夢を捨てず、当初は美術学校に入学する。しかし視力を心配する周囲の大人たちの説得もあって伝統的な音楽学校に入り直す決断をした。6歳から習ったピアノには音響装置以上の興味は持てなかったが、9歳で入った聖歌隊で歌うことは好きだったとシェーファー本人が述べている。

しかし結局はクラシックの音楽教育に馴染めず、間もなく学校を自主退学してヨーロッパに（おそらく船で）渡る。シェーファーの音楽家人生はここから始まった。正式ではないが作曲を学び各国の民族音楽に触れ、8年後にカナダに戻ると音楽界で頭角を現す。その後サイモン・フレイザー大学の教員に就くが、ここでも音楽教育の伝統と衝突する。しかしシェーファーが逞しいのは、大学に自身の居場所を確保するためにコミュニケーション学科に移り、そこでの研究費を捻出するために「サウンドスケープ」という概念を発明したことだ。そしてこの発明がこの後のシェーファーの音楽家人生と深く響き合っていく。

もともとサウンド（聴覚）とスケープ（視覚）で捉えた世界は、生まれつき視力の弱いシェーファーの世界の捉え方、知覚の使い方そのものである。氏が騒音問題に敏感だったのも、自身が光のない世界（音だけの世界）で生きる可能性があったことも影響しただろう。シェーファーは哲学者や研究者ではなく音楽家である。サウンドスケープとは、視覚障害のあるひとりの芸術家が極めた「個の世界」の先に辿り着いた普遍的な調和だった。ここから先、この発明がどのように世界に広がったかは周知の通りだが、氏にとってそれはあくまで結果論に過ぎない。シェーファーは常に今に集中し、即興音楽のように人生を歩んできたからだ<sup>vi</sup>。8歳で片方の目を失った経験が、人生の危機を生きる力に変える知恵や身体感覚を育んだ。

代表的な著書『The Tuning of The World（邦題：世界の調律）』（1976）の出版と同時期に、シェーファーは大学を辞めている。しなやかな即興性や創造性、固定観念にしばられない自由な生き方は芸術家の人生そのものである。ちなみに晩年には自らのアルツハイマーをタイトルにした作品も残している。ユーモアと即興はとても相性がいいし、ピンチをチャンスに変えてきた氏の生きる姿勢は最後まで変わらなかったことがうかがえる。

何よりも音楽と美術、聴覚と視覚をつなぐ共感覚的なサウンドスケープは音楽の世界そのものを豊かに広げた。シェーファーがサウンド・エデュケーション<sup>viii</sup>で目指したのは聴覚至上主義でも差別主義でもなく、生まれつき弱かった視力を聴力で補うような全的で調和のとれた生き方だ。残された美しい図形楽譜は、全身で捉えた鳴り響く森羅万象（Sonic

Universe) のスケッチである<sup>ix</sup>。

### 3. 2020～2021 の活動記録から

コロナ時代が始まるとすぐに世界各国でロックダウンや Stay Home が叫ばれた。Youtube や SNS には連日、有名無名に関わらず世界中のアーティストたちが動画を投稿し始めた。アパートのバルコニーでアリアを歌う女性、狭いキッチンで踊るバレリーナ、子どもを背負って練習するチェロ奏者、分断されたオーケストラ団員たち、芸術家たちは今まで隠していた舞台裏や日常生活を惜しげもなく公開し孤独に耐えた。ふりかえれば 2020 年の芸術世界は美しかったと思う。人類が長い歴史の中でなぜ芸術を必要としてきたのか、その意味に光が当たったような瞬間だった。

この時期に特筆すべきなのは、国が初めてアーティストの仕事を「ジャンルや収入や経歴に関わらず」認め、手を差し伸べたことだった。クラシックも大道芸も同じ場に立つことができた。著作権団体も作家支援に協力したことで体制が整い、結果的に実験的でクリエイティブな創作が可能となった。残念ながら国や都の個人支援はこの1年で終了し、翌年からはふたたび社会の枠外となる。結果的に梯子を外された活動が淘汰されつつあるのが 2022 年夏の現況である。

以下、筆者個人がこの支援制度を使って制作したふたつの映像作品を紹介したい。いずれも映像ロジックではなく、視覚と聴覚をつなぐサウンド・エデュケーションの応用として音楽的な発想で制作している。撮影はいずれも古い iPhone1 台のみ、編集には iPad 付属の映像編集アプリ iMovie を使用した。聴覚障害の鑑賞者も想定し字幕付きにした。

#### ① 『空耳散歩 LISTEN／THINK／IMAGINE』

- URL : <https://cheerforart.jp/detail/3043> (2020年8月公開)
- 参加メンバー  
後半ゲスト：雫境(聾の舞踏家、非言語手話)、小日山拓也(朗読、走馬燈制作)
- 撮影 Staff : Hana IMAI, Anlogsiki
- 映像ディレクター、ピアノ：ササマユウコ
- 助成：東京都（東京アートにエールを！音楽部門）

【内容】「目で大きく、耳でみる、全身をひらく」をテーマに、筆者が 2015 年から展開する音×言葉の活動「空耳図書館」<sup>x</sup>、「即興カフェ」の哲学エッセンスを散りばめた映像。前半は Stay Home の日常、実験を記録した内的思考のドキュメンタリー、後半は舞踏と美術を交えた「宇宙の音楽」をテーマにした創作。全編を通して即興的な時間の中で『音楽とは何か』を問う。

②空耳図書館のはるやすみ映像版『春と修羅 序～わたくしといふ現象は』

- URL : <https://youtu.be/52qBhZJyTHo> (2021年3月11日公開)
- 参加メンバー (50音順) : 新井英夫 (体奏家), 板坂記代子 (衣装), 石橋鼓太郎 (朗読), 小日山拓也 (仮面), 三宅博子 (声)
- 映像ディレクター, 音楽 : ササユウコ
- 助成 : 令和2年度文化庁文化芸術活動の継続支援事業 (個人 : ササユウコの音楽活動『コロナ時代の新しいオンガクのかたちを思考実験する②～空耳図書館の活動から』)

【内容】オンライン活動の環境整備に続き、東日本大震災・福島原発事故から10年の節目にあたる2021年3月11日に寄せて、岩手県出身の宮沢賢治詩集『春と修羅』の序章を映像化した。条件が刻々と変化する緊急事態宣言下もひとつの音楽と捉え、メンバーと共に即興的に対応した。

【音楽】即興ではなく作曲している。詩集内の作品『原体剣舞連』の「dah dah dah dah-dah-sko dah dah」のリズム、歌舞伎の「序の舞」(ポン・スタ・ポン)、岩手の獅子踊りと親和性のある北米ネイティブ・アメリカンのラウンド・ドラムをポリリズムに重ねた。使用したアプリ「Loopy HD」は入力インジケータの各トラックが自転し、ライブ録音で入力中の波形も円環で表示される。各トラックを視覚的に捉えながら、全体を一本のループ時間として俯瞰できる。各トラックを円環のパート譜に落とし込み、複数人で演奏するためのスケッチとして使うことも可能<sup>xi</sup>。

#### 4. 『春と修羅 序』の撮影メモ

岩手県出身の宮沢賢治が生前唯一出版した詩集が『春と修羅』(1924年/大正13年)である。この自費出版の詩集はほとんど売れなかったが、第一次世界大戦やスペイン風邪の流行、関東大震災といった100年前の激動が今の時代の空気と重なると感じた。また賢治の言葉が持つリズム、その音楽性にも興味があった。ちなみに賢治の最愛の妹はスペイン風邪の予後で亡くなり、自身も肺を患い37歳で亡くなっている。死後に発表された童話のイメージが強い賢治だが、本人の内心は前衛的な詩人、ダダイストだったと推測する。今回は詳しく触れないが、ダダイズムと即興音楽は非常に親和性が高い。欧米はもちろん、日本を代表するダダイスト中原中也も音楽家と組んだ朗読会を数多く開催している。何より中也がこの『春と修羅』を愛読し、大きな影響を受けていたことは大変興味深い<sup>xii</sup>。

東京の緊急事態宣言と重なった撮影期間は、公共施設が使用不可となり撮影場所に苦労した。冬の野外に繰り出したものの都内の公園からは「自由」が驚くほど失われていた。それに加えて公園内でも2メートルの間隔をあけることが求められ、パフォーマンスや撮影行為は禁止となった。公園担当者に問い合わせると「ダンス等の練習を個人的にスマホで記録するのは可」ということだったので、新井の即興的な表現の断片をスマホで記録し、

後から音源のように編集した。撮影後半はメンバーが集まることも難しかったので、朗読場面は Zoom で収録しコロナ時代の記録としてそのまま採用した。

この Zoom の登場はそれまでの時空の捉え方、人が集まることの意味を大きく変えたと思う。身体の内輪郭は欠損し、音声と動きはズレ、映像は固まり、バーチャルな背景はリアルを排した。誰もが不慣れな世界では完璧よりも寛容さが求められ、ヘタクソな音楽を皆で一生懸命に奏でているような感覚があった。

ちなみに映像メンバーは現在それぞれ新たな人生のフェーズに入ったが、これからも緩やかにコレクティブに活動を継続したいと考えている。思考実験だけでなく各自の専門性（サウンドスケープ、野口体操、美術、音楽療法、音楽人類学、工芸、手話）から音楽を多角的に捉え直すミュージック・ハブ的な役割を模索したい。

## 5. よく生きるとは何か

現在、東京六本木の森美術館では『地球がまわる音を聴く〜パンデミック以降のウェルビーイング』<sup>xiii</sup>が開催されている。今年に入ってから「ウェルビーイング」という言葉を目にする機会が増えた。パラダイムシフトや社会の分断が進む疫病の時代に、自らの人生を見失わないために問うべきテーマだろう。しかし一方で、曖昧な言葉が持つ危うさも感じている。

この展覧会で提示された「ウェルビーイング」には、主観と客観、つまり天動説と地動説の二項対立と同様の課題が内在していることにも気づかされた。例えば、私の人生を「誰が」「どこから」観るのか。ミクロコスモス・マクロコスモス、内と外、総合的に Well であると判断するのは誰か。人生は相対評価か絶対評価か、そもそも評価すべきか。SNS のフォロワーや収入や血圧などを数値化して判断しても、それは人生の断片に過ぎない。

ちなみにこの展覧会のタイトル『地球がまわる音を聴く』は、筆者の前述映像①でも取り上げたオノ・ヨーコ自費出版の処女作『グレープフルーツ・ブック』（1964）からの引用である。想像することで“きこえない音をきく”作品は、シェーファー同様にジョン・ケージから影響を受けたオノの実験音楽である。この言葉が採用された理由には3人のキュレーターで構成された展覧会を貫くひとつの大きな視点、人生の主體的な捉え方を「ウェルビーイング（よく生きる）」と定義する意図があったようだが、音楽の前衛作品がこの文脈で扱われることには違和感があった。各展示は興味深かったが、ミクロとマクロの視点を彷徨いながら世界の分断を体現するような漠然とした不安感も沸き上がった。

しかし、それこそが“今の世界”だろうとも思う。猛スピードで流れ去ろうとする瞬間を捉え、線につなぐことで精一杯だ。何が正解なのかは誰にも判らないのである。この展覧会が開幕した6月の東京には、既にコロナ時代を「ふりかえる」ような空気も生まれつつあった。しかしそこから間もなく感染者が世界一まで激増し、筆者も自宅療養者となった。私たちは未だパンデミックを生きている。はたしてこの病から本当に学ぶべきことは何だろう。

生きることは即興である。それはまるでヘタクソな音楽のようだ<sup>xiv</sup>。演奏者として即興をふりかえる時、そこには点と線、ふたつの時間が存在する。点はあるという間に流れ去り、その瞬間の手触り、心の動き、風景、つまり肌理だけが残る。この点をつないでも全体の線は再現されず、かといって線の時間を解体すれば点が立ち現れる訳でもない。再生可能な録音物でない限り、即興の良し悪しを判断するのは漠然とした全体の印象だ。しかも最後の1音が鳴り終わった後で立ち現れる時間もある。この時間がどこに向かうのか実は誰にもわからない。人生は響き合いながら変化する音風景の連続だからだ。自分の人生を自分で正しく評価することなど不可能かもしれない。

サウンドスケープとは「図」と「地」がつくる「場」のことである<sup>xv</sup>。忘れてならないのは、この「場」の肌理／テクスチャは常に動いているということだ。音地図として固定された世界は記憶の断片に過ぎない。そこで示されるのは、サウンド（聴覚）スケープ（視覚）という知覚の使い方、世界の捉え方である。「ウェルビーイング」とは世界の状態か、世界を捉えようとする私の状態か。ただひとつ確かなのは、即興を奏でるその瞬間はそれまで生きた時間が間違いなく表出するということだ。よく生きる人からは、よい音がする。よく聴く人でもある。鳴り響く森羅万象を聴いたシェーファーは結果的によく生きた人だろう。「地球がまわる音」も全身で聴いたはずだ<sup>xvi</sup>。

ここでふたたび「生きる」とは何かと考える。私はなぜ生きるのかと問い換えてもいい。

「地球がまわる音」とはどのような音だろう。その音を通奏低音に聴き、即興する自分を想像する。地球がまわる、私は生きる。それは何ともシンプルで、清々しい感覚だ。

## 注

- i 空耳図書館 哲学散歩「きのこの時間～美術×サウンドスケープ」はコロナ禍の2020年10月にも大学生を交えて明治神宮で実施した（案内人：小日山拓也 主催：芸術教育デザイン室 CONNECT/コネクト）
- ii 建築ジャーナル『川のある暮らし』東京・神田川のサウンドスケープを寄稿 2020年4月号
- iii 大人の空耳図書館「哲学カフェ入門：生きるための「死」を考える」．（2020年3月14日開催予定 延期のち中止．講師：寺田俊郎（上智大学） 場所：相模原市立市民・大学交流センター 主催：芸術教育デザイン室 CONNECT/コネクト）
- iv 聾CODA聴「対話の時間」（講師：雫境，米内山陽子，ササマユウコ 場所：新宿区若松地域センター・ホール 主催：芸術教育デザイン室 CONNECT/コネクト）
- v エル・システムジャパン主催トークセッション，東京芸術劇場主催社会共生セミナーなど．
- vi 弘前大学大学院今田匡彦研究室社会人研究生（2011～2013）．2014年3月発行の日本音楽教育学会『実践ジャーナル』査読論文「内と外をつなぐ柔らかな耳」（今井裕子）掲載．
- vii シェーファー 本人のインタビュー『モア・ザン・ミュージック ミュージックセラピーからサウンドスケープまで』若尾裕著（1990 勁草書房）に詳しい．
- viii サウンドスケープの思考を実践的・多角的に学び・教えるレッスンの総称．
- ix Youtube の「Vancouver Chamber Choir」チャンネルではシェーファーの図形楽譜と音源を視聴することができる．
- x 2015～2019年，非言語 絵本を図形楽譜や絵画鑑賞の入口と捉え，アーティストをゲスト講師に子どもゆめ基金助成事業・読書活動として計五回実施．町田市・相模原市の親子対象．
- xi Youtube 「空耳図書館チャンネル」にメンバーが練習する記録動画あり
- xii 中原中也の詩集『山羊の歌』（1934 昭9）に収録された『サーカス』の印象的なフレーズ「ゆあーん，ゆよーん」も，賢治の原体剣舞連「ダダダダ～」からインスピレーションを得たと言われている．ちなみに年齢は中也が10歳ほど下である．
- xiii 2022年6月29日～11月6日まで開催
- xiv 2016年8月26日下北沢 B&B にて開催された若尾裕，新井英夫，ササマユウコが出演した座談会のテーマ．若尾氏が翻訳した『フリー・プレイ』（S.ナハマノヴィッチ著）の出版を記念して，若尾全著作本，訳本をふりかえりながら即興的な音楽談義となった．
- xv R.M.シェーファー著『世界の調律』（平凡社 1986）第10章「知覚」より
- xvi R.M.Schafer"LISTEN" 2009年カナダ NFB ドキュメンタリー  
<https://youtu.be/rOlxuXHWfHw>